

三鷹ネットワーク大学推進機構

『民学産公』協働研究事業

持続可能で活力ある三鷹づくりの居場所・

就労の場を「まちづくり講座」を通じてつくる

—労働者協同組合法施行を目前に、協同労働を軸にして—

成果報告書

一般社団法人 協同総合研究所

成果報告書 目次

1、本事業の概要

- (1) 目的
- (2) 背景
- (3) 研究事業の期間
- (4) 申請団体のプロフィール
- (5) 参加団体のプロフィール

2、労働者協同組合・協同労働

- (1) 労働者協同組合
- (2) 協同労働
- (3) 労働者協同組合法の制定、施行

3、『働くこと再発見』講座 - 三鷹で創る協同労働 - の開催

- (1) 概要（参加者、会場、カリキュラム）
- (2) 各回の報告内容と参加者の感想

4、『働くこと再発見』市民から立ちあげる共生社会」シンポジウム

- (1) 第1部
①相良報告 ②岡田報告 ③講座受講生のパネルディスカッション ④第1部感想
- (2) 第2部
①講演内容 ②講演感想 ③第2部鼎談 ④第2部鼎談感想
- (3) 全体感想

5、事業成果

- (1) 三鷹市で協同労働を軸に、団体が連帯してつくる仕事おこしの萌芽が生まれた
- (2) 協同労働への共感・理解の広がり
- (3) 協同労働を軸にした学習運動のコミュニティがつけられた

6、今後の取り組み

- (1) 講座後のコミュニティの継続
- (2) ワーカーズコープセンター事業団の三鷹市内での拠点づくり
- (3) 三鷹市協同労働推進ネットワーク（仮）づくり

7、最後に

1、本事業の概要

(1) 目的

「労働者協同組合法」が施行されたことを契機として、協同労働を軸として多様な市民が出会い、一人ひとりの生き方・働き方を探求しながら、市民が主体となり、学びの場・居場所・仕事をつくる実証実験のために講座を開講した。

(2) 背景

筆者は現在、三鷹市まちづくり研究員として「自治が息づく三鷹で協同労働を志向するー労働者協同組合法を活用した持続可能で活力ある地域づくりへー」を研究している。労働者協同組合法（以下：労協法）は2022年10月施行のため2年計画で論文を作成している。

1年が経過し、労働者協同組合（ワーカーズコープ）の働き方として生まれた協同労働や労協法について、市長、市議会議員との懇談、ネットワーク大学の講座等を開催して周知を広げ、協同労働・労働者協同組合の三鷹市での可能性を探ってきた。それとともに「量り売りとまちのお店」を協同労働で設立した「野の」8名との出会いと開設、まちづくり研究員の共同研究員である文化学習協同ネットワーク（以下：協同ネット）の佐藤洋作代表らと検討して「コモンズ三鷹武蔵野会議」を立ち上げるに至っている。よりまちづくり研究員の研究成果を進め、市民との多様な出会いを通じて、三鷹市内における協同労働の価値・可能性を講座の開講を通じて、深めていくことにした。

現在、厚生労働省でも労働者協同組合の相談窓口・認知・実装化を進める事業があり、各都道府県・各自治体でも労協法や協同労働の周知や相談に予算をつけている。そのなかで居住地の三鷹市でも協同労働や労働者協同組合の社会的認知を広げたい。自治体政策として労働者協同組合法をどのように位置づけるのか等も深めるためにも、研究事業の一環で行うことで多様な広報が展開できると考え、本事業に応募し、事業実施してきた。

(3) 研究事業の期間

2022年7月1日～2023年2月17日

『民学産公』協働研究事業は全6回（9月～11月）の「働くこと再発見」（まちづくり講座・仕事おこし講座）」と講座の学びを発表する（1月28日）「『働くこと再発見』ー市民から立ち上げる共生社会ー」を開催した。

(4) 申請団体のプロフィール

■協同総合研究所

1991年開設。所在地は東京都豊島区東池袋。

労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会（現在、2万6千人の就労者、372億の年間事業高【会員合計】）が母体となり設立。現在、約500名が会員となっている（研究者

と実践者)。理事長は明治大学の太田研道教授。「協同を通じて、希望ある未来を探究する」ことを目指し、2022年は「協同社会のデザイン」をテーマに研究活動を進めている。「協同」を軸として、労働者協同組合、協同労働、社会的連帯経済、仕事おこし、地域づくり等を研究している。研究者と実践者の融合・連携を大切にして運営している。

協同総合研究所ホームページ：<https://jicr.roukyou.gr.jp/>

(5) 参加団体のプロフィール

■文化学習協同ネットワーク

1974年開設。本部所在地は東京都三鷹市（事業所は武蔵野・西東京・練馬・相模原・中野等）1974年に父母運営の塾づくり運動から始める。中学生のための「勉強会」をはじめ、1980年に（有）多摩地域教育研究所として法人登記。その後1999年に「非営利活動法人文化学習協同ネットワーク」として法人登記。現在は、塾以外に不登校の居場所づくり、コミュニティベーカリー風のすみか、若者就労支援事業（地域若者サポートステーション他）、困窮家庭の子ども若者支援等を行っている。競争から共同の教育を目指し、多様な体験プログラムも実施しながら、子ども・若者の学ぶことと働くことを協同で探求することを推進している。

文化学習協同ネットワークホームページ <https://www.npobunka.net/>

■日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会 センター事業団 東京三多摩山梨事業本部

1987年に日本のモデル労働者協同組合として設立された。現在、10,000人強の就労者、220億円の年間事業高で、日本最大の労働者協同組合である。「共に生きる、共に働く」ことを大切にして、全国各地で労働者協同組合運動、協同労働運動を推進している。センター事業団は全国20の地方本部（事業本部）があり、東京三多摩山梨事業本部は東京多摩地域と山梨県を担当している。現在、多摩地域（11市）、山梨（2市町）で事業・運動を展開している。三鷹市内にはセンター事業団の事業所はない。

日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会 センター事業団 東京三多摩山梨事業本部ホームページ

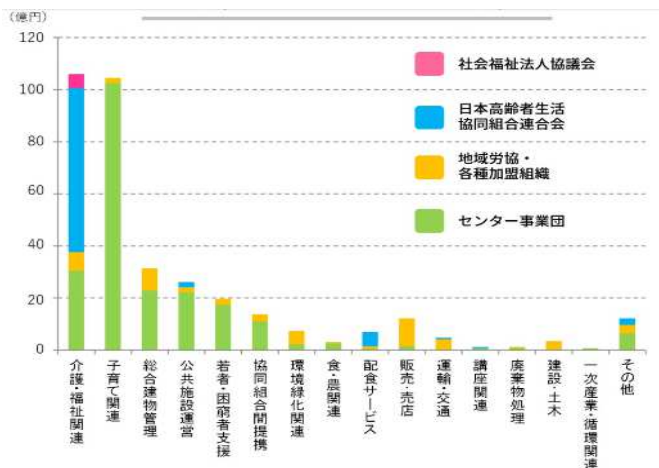
https://santama.roukyou.gr.jp/?doing_wp_cron=1674798938.3540248870849609375000

2、労働者協同組合・協同労働

(1) 労働者協同組合

労働者協同組合は、協同組合の1つの団体である。協同組合とは「人びとの自治的な組織であり、自発的に手を結んだ人びとが、共同で所有し民主的に管理する事業体をつうじて、共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願いをかなえることを目的」¹としている。つまり協同組合は共益な組織として、必要と思った方々が組合員となり、協同して事業・活動する団体である。協同組合の仲間には、農業協同組合（JA）、漁業協同組合（JF）、森林組合、生活協同組合（生協）、国民共済COOP、信用組合、信用金庫、労働金庫等がある。協同組合の種類によって組合員になる対象者が違う。農協は農家が組合員、生協は消費者が組合員になり、労働者協同組合は労働者が組合員になる。

労働者協同組合は、働く人が出資し組合員となり、経営にも参加する協同組合である。労働者協同組合法では、労働者協同組合の基本原則として「出資」「意見反映」「労働に従事」の3つがある。



日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会加盟団体の事業内容と事業高



協同労働の働き方

(2) 協同労働

「労働者協同組合の働き方とは何か」を考えるなかで、日本労協連では1997年に労働者協同組合の実践上のなかで「協同労働」と位置付けて事業・運動を進めてきた²。

最新の協同労働の協同組合原則では、協同労働の働き方を「一人ひとりが主人公となる事業体をつくり、生活と地域の必要、困難を働くことにつなげ、みんなで出資し、民主的

¹ 協同組合のアイデンティティに関するICA（国際協同組合同盟）声明（協同組合原則）

² 1992年の日本労協連の総会資料の一部に、「協同労働者」という言葉が出てくるが、実践上で使われ始めたのは1997年となる。

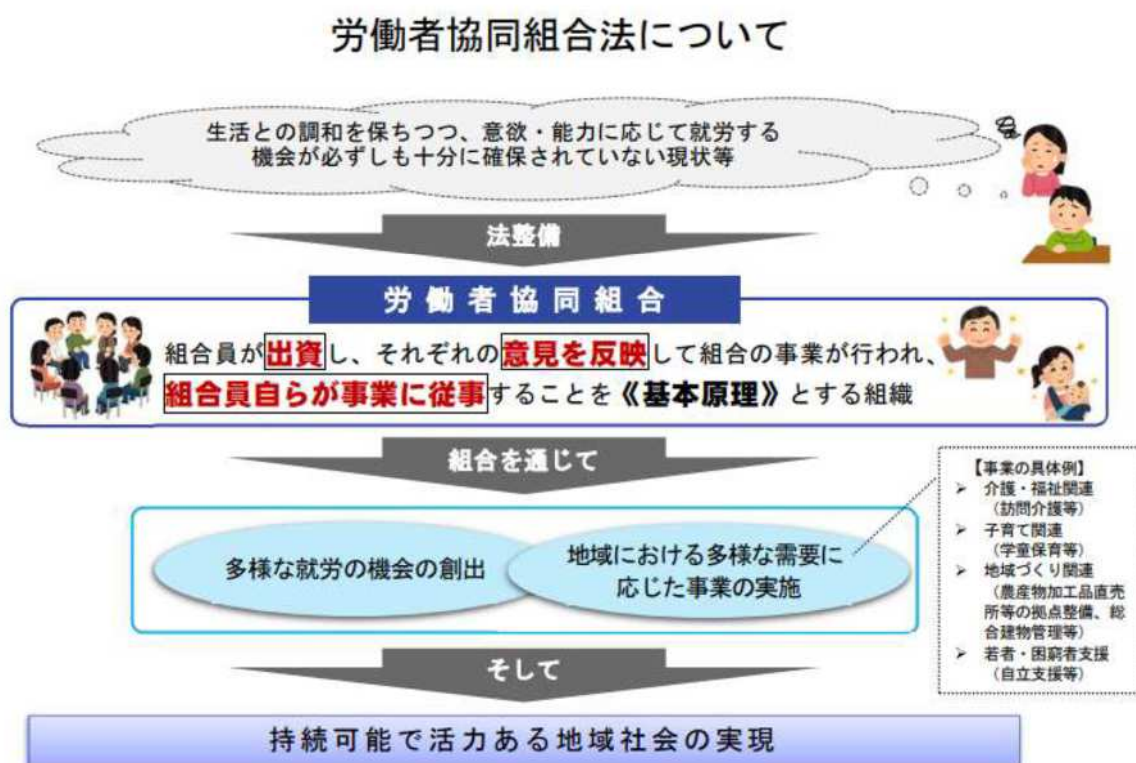
に運営し、責任を分かち合う」としている。

協同労働で働く人びとは日本に約 10 万人おり、40 年の歴史、1,000 億円の事業規模があるとされている。

(3) 労働者協同組合法の制定、施行

2020 年 12 月 4 日に参議院本会議採択、同 11 日に官報が交付、制定された。そして 2022 年 10 月 1 日に施行となった。法制定プロセスの最大の特徴は、全党全会派が賛同し議員立法として成立したことである。全党全会派で成立したこともあり、党派を超えて理解いただきやすい環境となっている。

労働者協同組合は「多様な就労の機会の創出」と「地域における多様な需要に応じた事業の実施」を通じて、「持続可能で活力ある地域社会の実現」に資することを目的である。



厚生労働省HP「労働者協同組合概要」から

[HTTPS://WWW.MHLW.GO.JP/STF/NEWPAGE_14982.HTML](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_14982.html)

施行後、2023 年 2 月 11 日現在で、26 の労働者協同組合法人が生まれている。事業内容は既存の労働者協同組合で多く行っている福祉事業の他にも、キャンプ場の運営や葬送事業、ソフトウェア開発などの多様な分野で仕事をおこす団体が生まれている。

3, 「『働くこと再発見』講座－三鷹で創る協同労働－の開催」

(1) 概要 (参加者、会場、カリキュラム)

講座は計6回開催し、毎回平均して15人が参加した。1回でも参加した人で三鷹在住・在勤者は16人であった(他武蔵野市、杉並区、多摩地域から)。

開催目的は、「持続可能で活力ある三鷹づくりを進めるために、協同労働の働き方を参加者同士で学び、それを仕事おこし・コミュニティづくりに生かす」とした。また各講座終了後に参加者に感想を書いていただき、次の講座の開始時、全体にリフレクションをして、学びを全体に共有することを心掛けて進めた。

参加者には協同総合研究所で発行した『協同ではたらくガイドブック入門編・実践編』を講座参加費・資料として一人1,000円で、21人が購入した。

チラシ作成は、協同ネットのユースラボに関わる若者のデザイナーにチラシをお願いした。広報宣伝は、三鷹ネットワーク大学が持つ広報媒体(三鷹駅内のチラシ配架、メールマガジン他)への掲載、協同ネットがもつネットワーク、協同総合研究所、ワーカーズコープ・労協センター事業団のネットワークを活用し、講座への参加を呼び掛けた。



カリキュラム内容は、表1の通りである。

開催日	内容【目的】	話題提供者
第1回 【9/14】	自己紹介、協同労働の働き方。働くことの意味【ガイダンス】	協同総合研究所 相良孝雄
第2回 【9/28】	『医師中村哲の仕事・働くということ』上映と感想交流【はたらくことを考える】	協同総合研究所 相良孝雄
第3回 【10/12】	協同の視点から三鷹と自分の未来を語り合おう【生き方と地域とつなぐ】	量り売りとまちの台所「野の」岡田光
第4回 【10/26】	ありたい姿を実現する協同労働による仕事おこし【仕事おこしの種探し】	労協センター事業団東京三多摩山梨事業本部本部長 扶蕪文重
第5回 【11/9】	協同労働の仕事おこしワークショップ①【仕事おこしの具体的検討】	文化学習協同ネットワーク 代表 佐藤洋作

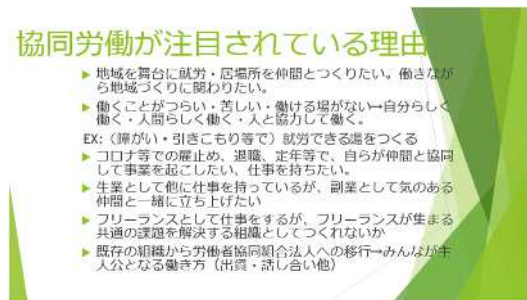
第6回 【11/30】	協同労働による仕事おこしワークショップ② 【仕事おこしの具体的検討】	参加者全員
----------------	---------------------------------------	-------

表1 三鷹市 民学産公協働研究事業 まちづくり講座・仕事おこし講座カリキュラム
(いずれも18時から、第1～2回ネットワーク大学、第3～6回協同ネットで開催)

(2) 各回の報告内容と参加者の感想

第1回

第1回は、講座の目的を共有した上で、各参加者の自己紹介（名前・住居地・勤務地・講座への問題意識・趣味・特技・最近の関心ごと）について、ゆっくり時間を使い、お互いを知り合うことをテーマにした。報告は、私から協同労働の働き方や労働者協同組合の概況、労協法が成立し、労働者協同組合や協同労働で団体をつくる事例を紹介した。



講座参加動機

- 「労働者協同組合法」が制定され、「協同組合」組織で仕事したいから
- ワーカーズコープは以前より知ってはいたが、モデル性のある事例を見つけたく参加した。これを機会に自身で「協同労働」を実践できるかも考えてみたい。
- 「社会的連帯経済」に関心があり、その中心に協同労働があると思ったこと。また家族が協同労働をベースにした団体を立ち上げたことが動機である。
- この間、地域で活動を行うようになった。そこで地域で必要な活動を評価して事業にすることで、人や地域が元気になり、少しは地域経済が循環するのではないかと思うようになった。その意味で協同労働を地域の人と一緒に考えてみたいと思った。
- 若い時のように、先方の条件に無理やり自分を合わせようと努力することさえ正直、今更うんざりだと思ってしまう自分がいた。自分を全否定するようなところから始めなくてはならない仕事探しは、どう考えても不自然でそんな気持ちでは続く訳がない。そこでどうしようかと思っていたときに、本講座のことを知った。

第2回

第2回は、「働く目的・意味」を参加者同士で交流することに重点を置いた。「医師中村哲の仕事・働くということ」のDVDを鑑賞後、その意見交流。その後「働くことの楽し

いか、苦しいか」という問いや、働く目的として「ライスワーク（生計・食べるため）・ライフワーク（自己実現・実績づくり）・ソウルワーク（他人や社会のため）」に分けグループで議論した。



- 中村哲さんの活動からは、理解が得られなくても諦めず行動で示して徐々に信頼を得ていて、その覚悟に人がついていきたくなるのだと感じた。
- 日本では働くことは会社員のように既存の仕事、会社に入るイメージが強いので、中村哲さんの靴作りなど、地域の需要に合わせて新しい仕事を作って雇用を生み出すことは、自分にはない発想だった。
- 労働者が意見を出し合いよりよい方向へ活動する協同労働は、労働者が協力し、人の為に働く気持ちを持つことが必要だと感じた。
- 「働くことは楽しい」と答えた。それは楽しいと思う時間は苦しいと思う時間よりも短い、楽しいと思うことがあるだけで、「楽しい」と思いたいと考えたからである。
- 働くことは「苦しい」ほどではなかったですが、楽しくはない。上司からの指示により動いていることが多く「生活のために働く」だからか。
- 自分の思い通りに動いているとき、仲間と一緒に目標に向かって働いているとき、自分の成長が見えた、評価されたときは楽しい。しかし、仲間とうまくやっていけない、成果が出せない、評価されない、忙しすぎるなどのときは苦しい。

第3回

第3回は、「三鷹と自分の生き方の未来を考えること」を重点に開催した。ワーカーズコープへの移行を目指して協同労働で立ち上げた「量り売りとまちの台所『野の』」³の岡田光さんが報告した。「野の」は5月30日に合同会社を設立し、10月11日に三鷹駅南口徒歩6分の場所に開店した。事業は「調味料や日用品の量り売りの事業」「日替わりシェ

³ Imidas 電子版（集英社）『『社会的連帯経済』への誘い 16『労働者協同組合法』が創る未来』（工藤律子著）に「野の」が紹介 https://imidas.jp/latingang/?article_id=l-70-047-22-12-g471

アキッチン事業」「仕事、料理教室等のイベント」である⁴。「野の」は三鷹・武蔵野市民8名（市民活動参加者・料理家・医療従事者・学生等）で立ち上げ、「地域という小さな範囲から、私たちのペースで、私たちの手によって、地球環境や人・モノ・社会とのつながりをつくり直すことに通して、暮らしの豊かさと向き合える場を、共につくることを目指す」ことを目的にしている。「野の」報告後、報告への質問や感想を出し合った上で、まちの未来と自分の生き方の未来を交流した。

2. 野のについて

地域という小さな範囲から、私たちのペースで、私たちの手によって、地球環境や人、モノ、社会とのつながりをつくり直すことを通して、暮らしの豊かさと向き合える場を、共につかっていくことをめざします。



量り売り / ばなめ売り



日替わりシェアキッチン



イベント

2. 野のについて

- 三鷹・武蔵野市民 8名
 - 市民活動関係者
 - 料理家
 - 医療従事者
 - 学生 などなど
- 5月30日「合同会社 野の」
- ワーカーズコープ（協同労働）への移行をめざして



3. 労働者協同組合に期待すること

- 自分たちの生活や将来の暮らしに関わることに、楽しく何かしらの動きを！
 - 利権のみを追求しない働きかた
- 生活圏から、自分たちの手でできること（自分たちにしかできないこと）の実現。
 - 政策や資本主義経済に任せられないニッチの実現
- 地域で働くことを通じて、地域の人や風土との繋がりを再評価・再構築。
 - 自分の役割をみつめること
- 世代やバックグラウンドを超えて誰もが働くことができる場づくり。
 - トップダウンのなかで消える声
 - 「鶴の一声」に依存できない自主性

5. 野の × 協同労働

- 暮らす地域を共有する。
- 遠回りでも丁寧にお互いの意思を定期的に共有する。不安や不満を溜め込まずに吐き出す。

- 商品選定基準
- 設立趣意書
- 野の憲章 など



- 量り売り
- シェアキッチン
- イベント主催など



■「量り売りのお店」をつくる発想に共感した。地球環境の持続可能性が問われている時代に挑戦的試みをしている新しさを感じた。同時に、味噌、醤油、豆腐など量り売りが一般的だった幼少期の町の景色を思い出し懐かしさを感じた。古き良き時代の文化・技術を発掘、継承し、現代に新しい価値を共創する試みに協同労働への希望を感じた。

■量り売りは、チリンチリン三鷹の活動中に、高齢の利用者の重い買い物は出来なくて不便だという声を聞いたことがきっかけとのこと。地域の困りごとの解消やつながりの大切さを重視されていると感じた。協同労働で実際のプロジェクトを進めることについて、自

⁴ 事業の紹介等は「野の」のホームページで <https://nonohakariuri.wixsite.com/home>

分は具体的なことを何も知らないことにも気づいた。

■事業継続の質問への回答として「スーパーと競うのではなくて、地域でお金がまわることを考えている」と言われ、はっとさせられた。仕事は利益を最大にするためという資本主義の考え方に自分が染まっていると感じ、お金より地域を重視することに驚いた。

第4回

第4回は、協同の視点から「仕事おこしの種探しと自分の生き方」をテーマにした。そこで協同労働のパイオニアであるセンター事業団の事例を扶藪文重センター事業団東京三多摩山梨事業本部本部長が報告した。報告では、立川市（子ども未来センター）・国分寺市（障害者総合支援法で運営するあっぷ）・八王子市（多摩信用金庫・八王子との地域活性化協定を結ぶまの駅八王子CHITOSEYA）・山梨市（地域の農家さんと共につくる農の継承の活動）を紹介した。

これからの地域にとって

- ・自分たちで自分たちの地域をよりよくできるという実感が大切。
- ・その仕組みの一つとしてワーカーズ法が活用できる。
- ・意見反映は組織の内部関係だけではなく、仕事を通じて外に開き、地域運営の原理に高めていく。



■「三鷹(在住地)のまちの未来」と「自分の生き方の未来」は、直接的なつながりは見いだせないが、その間に、活動をはさむ(まちの未来-まちでの活動-自分の生き方の未来)と関係性を具体化できると感じた。地域内で活動している方のお話が聞けると、自分としての「まちの未来」と「自分の生き方の未来」との関係が見えやすいと思った。しかし私は仕事中心の人間なので、まだ具体化は難しい。

■「立川の保育」と「山梨の農業」の話聞き、都市農業の見通しが少し開けた。協同労働の職種は保育・生活支援・介護が多いが、これから様々な職種が増えると思った。

第5回


第5回は、「協同による仕事おこしの具体的検討」をテーマにした。塾の設立、風のすみや（パン屋）の立ち上げなど、三鷹に根を張り活動してきた協同ネットの佐藤洋作代表

が報告した。協同ネットの歴史から、協同の力で仕事と学びの場をつくってきたことが語られた。その後、報告で感じたこと・考えたこと、そして協同労働による仕事おこしをグループで検討した。

協同ネットについて

70年代半ばに父兄の手により始まった協同ネットを起点として、不登校、社会的ひきこもり、若者支援と時代のニーズに合わせながら活動の場を広げてきました。


- 1974** ① 父母運営の協同づくり運動
1974-一年生学のための「発達会」(産三産地)で開設
1980年12月「発達会」を協同ネットとして法人化
1985-父母運営の協同づくり運動に参加
- 1993** ② 不登校の居場所づくり
1993-アリススペース・コスモ主催
1997-運動部である新学期支援
- 1999** ③ NPO法人としての若者支援
1999-特定非営利活動法人として再出発
2004-コミュニティ・センターオープン
- 2005** ④ 若者支援事業の展開
2005-若者自立支援課
2007-ニゲヤの立ち上げ
発達系サテライト(2009)
協同ネット(2012)
2008-購買部の子ども若者支援
- 2010** ⑤ 地域共生社会基盤づくり
2010-多岐在協同場所
2022-ソーシャルファーム



若者と協同で働く場をつくる

- ① 若者統合型社会的企業 (WISE)
Work Integration Social Enterprise
1) 居場所の提供、2) 教育訓練の実施
3) 柔軟な雇用機会の提供、4) 一般 就労への移行支援
- ② ネットワークで仕事をつくる
(社会連帯経済)
社会連帯を基盤として実施されるさまざまな経済活動～社会的障壁に苦しむ人々も社会の中に取り込んでゆこうという趣旨
- ③ 多様な働き方 (ユニバーサル就労)
さまざまな理由で働きたいのに働けずにいるすべての人が働けるような仕組みをつくる
と同時に、誰にとっても働きやすく、働きがいのある職場環境を目指していく取り組み

④ 「良い働き方」づくりへの挑戦



DTPユースラボ
協同労働・NPO、行政から委託 (イベント・チラシ、ホームページ等)



- 子どもらが「働く自信」を持ってないでいることを改めて考える必要がある。
- 広く共感者を集めた社会的ネットワークのなかで「仕事をつくる・拡大する」ことが今後の社会をつくる時に鍵になると感じた。今の時代、効率主義・自己責任に抗して「スローのあり方」が求められると感じた。
- 佐藤さんは「三鷹の中村哲さん」という思いを持った。三鷹に「風のすみか」のような職業訓練的要素を持つ場所があるのは誇りで、三鷹がますます好きになった。

第6回

最終回として、「今までの講座を振り返り、一番興味を持ったこと、それをどのように生かしたいのか」をテーマに開催した。また1月28日のシンポジウム内容も検討した。



■さまざまな生活史や関心をもって集まったメンバーが集まり、講座を運営いただいたご苦勞に感謝。そのおかげで「このまま終わらせたくない、発展形態として学習会を続けていきたい」との共通の声がグループ討議で出た。それぞれの来し方に照らし、働き方や社会への関わり方を「協同労働」に託したいことは誰もが共通していた。

4、「働くこと再発見」市民から立ちあげる共生社会」シンポジウム

1月28日に武蔵野公会堂で「『働くこと再発見』市民から立ちあげる共生社会」を107名の参加で開催した。内容は二部構成であった。開催にあたり、「文化学習協同ネットワークの学習会」「三鷹市まちづくり推進機構『民学産公』協働研究事業」の一環で開催し、広く呼びかけて開催した。内容は以下の通りである。

第1部 地域からの報告－協同労働での地域づくり（13：30～14：40）

- 「働くこと再発見」講座の概要と協同労働・労働者協同組合 相良 孝雄
- 量り売りとまちの台所「野の」の取り組みから 岡田 光
- 「働くこと再発見」講座参加者とのパネルディスカッション
落合聡子/石毛萌/民部田駒子/岡田光 コーディネーター 相良 孝雄

第2部 講演と鼎談

- 講演（14：50～15：30）
「<共生と自治>への社会教育的アプローチ」 辻 浩（名古屋大学）
- 鼎談（15：30～16：30）
子ども・若者の出番のある地域づくり
辻 浩（名古屋大学）×井口 啓太郎（国立市公民館）×佐藤 洋作（協同ネット）



(1) 第1部

①相良報告

2年間、三鷹まちづくり研究員として、「労働者協同組合や協同労働を市内で実装化する可能性」を研究する理由と内容を紹介し、「働くこと再発見」講座の目的・内容・見えている成果を報告した。



働くこと再発見講座 成果

- 1、多世代の多様な市民が出会い、「働くこととは何か」をグループワークを中心に学びあい、探究する場となった。継続してこの場を開催してほしいとの想いが多数寄せられている。(3月1日に開催予定)【**学習運動のコミュニティが生まれた**】
- 2、参加者が「野の」、「文化学習協同ネットワーク」、「ワーカーズコープ」等を知るなかで、各団体とつながり、具体的に仕事をつくる、関わる萌芽が生まれている。三鷹市内での協同でまちづくり・仕事おこしをする拠点の1つになる可能性を持ち始めている。【**協同・連帯の仕事おこしの萌芽**】
- 3、協同労働の価値・可能性・質問が出され、自分の生き方や働き方と振り返りながら協同労働の理解が広がったこと。【**協同労働への共感・理解**】

②岡田報告

武蔵野市出身で現在大学4年生。持続可能な食・農に関心がある。2020年夏から2年間休学し、山梨県北杜市で農業をしてきた。

「野の」の構想は、2020年2月に立ち上がった。当時から全員がフラットな立場で働く協同労働を働き方として考えていた。活動を始めるときには時間がかかったが、その間、設立趣意書づくりを通じて、何を大切にしたいのかを議論・共有した。また協同労働、労働者協同組合について、相良さんや佐藤さんとも懇談して組織形態を考えてきた。事業準備として、市内のマルシェでポップアップをしながら、商品を自分たちで選定していった。2022年5月30日のごみゼロの日に、労働者協同組合法が施行されていないことや就労契約のあり方を考えた上で、合同会社として一人ひとりが出資し設立した。10月11日に三鷹駅南口徒歩6分のランドリー横のカフェスペースの場所に、「野の」の店舗を設けた。

「野の」が目指していることは、「量り売り」「食の地産地消」「ゴミ・プラスチック問題」「地域のつながり」「働きかた」「自然のなかで生まれた手仕事」の6つである。

4. 野のがめざすこと

設立趣意書より

① 量り売り

プラスチック容器や包装を使わず、必要なものを必要な分だけ自分で持参した容器で購入していただく量り売りのお店を運営します。



② 食の地産地消

できるだけ近くで買った季節の野菜や食材と、伝統的な調味料を使った手作りのごはん。自然や農、社会の循環へのつながりを感じられる食卓を目指し、提案していきます。



③ ゴミ・プラスチック問題

ゴミ箱に入れてしまっただけでは他人事になりがちなゴミ問題に、目を向けて、正しい知識をつけることを目指します。



4. 野のがめざすこと

設立趣意書より

④ 地域のつながり

地域をつながりを取り戻し、暮らしを自分たちの手で作ることをはじめます。自分のできることをしながら、誰かのことを思い合い、誰かが困った時にはスツと手を差し伸べ助け合える地域をつくっていきます。



⑤ 働きかた

職種を超えて、世代を超えて、立場を超えて、新しい働き方を一緒に考えます。一人ひとりをお互いに尊重して連帯して連帯しても働き方や働く場所をつくっていく過程を大切に進めていきます。



⑥ 自然のなかで生まれた手仕事

先人たちが築きあげてきた自然と調和する心得や技術、手仕事を自然に掘り出すことを通じて自然と共生する感性や豊かさにもまれる機会を提供していきます。



私は「暮らしを創る文化をつくっていききたい」という思いから「野の」に関わり始めた。今の社会は他律的であり、外部からの規範に依存するなかで、自己軸がぶれているないし持てないような社会であると感じている。

この間、第一次産業、インフラに関わる民営化が進み、競争力、高齢化、非生産性で淘汰される中小企業、伝統的な技術をもちながら廃業せざるをえなかった生産者も多くいる現状を目の当たりにしてきた。そのときに私自身は何を大切に、この地域に何を残したいかを考えるようになった。そのときには、外部のわかりやすい規範に従って、生きるだけでなく、自らが考えていることを議論しあう文化が必要だと考えている。そのような空間を「野の」でつくっていききたい。

協同労働には3つの魅力があると考えている。第1は、「働くことの延長に暮らすこと

があること」を働く身として感じられることである。「野の」は「食」に関わることで、生産者と消費者の間に立ち、自分が働いた先に地域ができあがることを感じやすい。第2は、メンバー全員が暮らしの豊かさと向き合う場として、意志主導型のコミュニティと言えるかもしれないが、統一性のなかに多様性がある職場をつくっていることである。それはとてもおもしろく新鮮で、多くの学ぶ場がある。第3は役割が固定的ではないことである。動的にダイナミックに役割を得ながら、自分がどう地域や他人に貢献できるのかを考える協同労働は、受動的ではない働き方としての強みがあると感じている。

少し話はずれるが、「野の」の課題としては小売り事業を運営する者として、どのように持続可能な経営体制をつくるのかがある。そのとき、当初自分たちがつくってきたビジョンに立ち戻り、軌道修正をしていくことが重要だと感じている。それと同時に、客観的に関わる応援団の存在が必要で、地域に開かれた風通しのよい職場づくりが今後、重要だと考えている。



③ 講座受講生のパネルディスカッション (コーディネーター相良)

○ 講座の参加動機

落合

現在、一般企業で正社員として6年働く。協同ネットには、働けるようにならないといけなさと感じ「風のすみか」の集中訓練プログラムに参加した。その後、気持ちにも余裕が出てきたなかで、協同労働の働き方を聞き、働くことの多様な選択肢を知るきっかけにもなると思い、講座に参加した。

石毛

落合さんと一緒に集中訓練プログラムに参加した。私は大学を中退して約6年間家に引きこもっていた。このままではだめだと思いプログラムに参加した。講座にははじめ中村哲さんの映画に興味があり参加したが、その後参加者で話していると、働いた経験の長い方々が働くことのあり方をとて説得力を持って話されていたことが印象的であった。その場で、自分とは違う意見を多く聞いて新鮮だったので、継続して参加した。

民部田

私は普段キャリアコンサルタントとして働いている。三鷹駅で講座のチラシを見て面白そうと思った。また市民の人と仕事をつくることに純粋に楽しそうだと感じた。キャリアに関わる相談には、所属する組織や人間関係で悩むことが多く、大学生では社会に出

るのが不安なことも聞く。「ネガティブから始まるはたらくってなんだろう」と、日々ぼんやりと感じ仕事をしてきたので、この講座でその問いのヒントも得たいと考えた。

○講座で学んだこと

落合

先ほど石毛さんからあったが、講座参加者の言葉に説得力や力強さを感じた。風のすみかの研修生のOBたちとも話すが、その場に比べて講座では多様な年齢層や経験された方が参加していたので違う視点で学ぶことができた。「野の」やワーカーズコープの具体的な実践を聞いたときに、「協同労働」が落ちた感覚があった。働き方や働くことを考える先には、「自分がどう生きたいのか」につながってくる。その感覚を大事にして、具体的な行動をしたいと思った。

石毛

私は人の目が気になり、「完璧でないとダメ」という気持ちを強く持っている。そして働くことは、お金を稼ぐためにしっかり働くという感覚を持っている。しかし協同労働の実践や中村哲さんのアフガニスタンで用水路をつくった話から、用意された仕事で働くのではなく、地域の課題を解決するために、自発的な働き方があることを示していたように感じた。「働くことはどう生きたいのか」にもつながり、そのことを大切にしたいと感じた。

民部田

中村哲さんの映画は、感動で涙が出たので、マスクをしていてよかった（笑）。用水路をつくったことも驚きだが、中村さんが地域住民と協力して何かを為し得ることを楽しんでいたことが一番印象に残っている。またワーカーズコープで運営する立川の子ども未来センターの事例では、協同労働として経営に関わり利用者のことを考えたからこそ、周りの子育て支援施設が閉所するなかでも、コロナ禍で孤立し虐待を防ぐ意味で、開設し続ける判断ができたと感じた。また同業者と「働くこととは何か」のテーマで深めたことがないですが、講座では多くの背景を持った方々とこのテーマで話し合えたことは、とてもおもしろく深いものであった。

○講座を経て、今後考えたいこと、取り組みたいこと

石毛

「野の」のシェアキッチン事業として、風のすみかで水曜日をお借りして「すみかふえ」を1月11日にオープンした。地域の方と働く場所をつくる試みを始めている。オープンには、風のすみかの常連さん、協同ネット、「野の」の知り合いなど、多くの方に来ていただいた。つながったからこそできることを実感し、新たな知り合いが生まれている。



「野の」シェアキッチン事業で水曜日に開店した「すみかふえ」のチラシ

落合

協同労働の現場を見たいと思い、立川市子ども未来センターに訪問した。実際「協同労働で働くってどうですか」と松原玲子所長に聞いた。そこで松原さんは「働いている人たち同士のもやもやを貯めこまずにとにかく話し合う。それは誰かを傷つけたり責めるためではなく、お互いが何を考えているのかを知るために」と話された。そのときに「できている職場を探す」ではなく、「居心地のよい職場を自分たちでつくること」に魅力を感じた。いつか私もそんな働き方ができたらと思った。また松原さんから全国会議や研修で学び続けていることを聞き、学ぶ大事さも感じた。新しい出会いとともに、自分から動くきっかけを講座でいただいたことは、自分の財産になった。

民部田

最終講座で「働くことや地域と関わること、どのように生きていのがわからなくなったね」という感想が出た。それは「働くこととは何か」という問いを止めたくないという思いがそこに来ていた参加者にはあったからだと思う。そこで「継続したこのような場を持って欲しい」と誰からともなく出てきた。またその問いを深めた仲間と話せる機会が継続してできることになり、わくわくしている。

大学生の就職活動支援では、今まで大学新卒後の選択肢として就職・起業だけと考えていた。しかし講座で学んだ協同労働などの選択肢ができる社会になるかもしれないと思ったときに、自分の仕事の範囲が広がったような気持ちになり、気楽な気持ちになった。今後のキャリアコンサルタントの仕事にも生かしていきたい。

○発表しての感想

岡田

すみかふえでは、風のすみかとのつながりで量り売りのお店に来ていただく流れもあり、そういう相乗効果はありがたい。

相良さんも話されていましたが、「適応する」ではなく「創造する」ことは、協同労働の特徴だと感じている。誰かに自分の生活を委ね、任せる暮らしや働き方、生き方はすご

く楽だが、自分たちで創造することを通じて、自分の役割が見えてくるので、面白いと考えている。これからも「野の」に関わり、学んでいきたい。

落合

自分が「ある仕事に自分をあわせていく考えに囚われていたこと」を講座やこの発表準備をするなかで思った。自分はどうしていききたいのかという小さな希望・感情を大切にしてもいいと思った。

石毛

「もっと楽しく生きられるのではないか」と考えたら「もっと生きやすくなるのではないか」と考えるようになった。自分の生き方・働き方を考えるなかで、協同労働は一つの選択肢だと思った。

民部田

今後も多様な人と交流したい。それが結果、三鷹や武蔵野地域のまちづくりにつながればと考えている。そして参加した人たちと生きている時間を大事にしながら、丁寧に暮らしたい。



④第1部 感想

- 協同労働がどのような働き方であるか詳しく知る機会となった。元々、就労、経営等について興味もあり、今後さらに深く学びたい。
- 安心して十分に「働くこと」について話し合いができる場づくり、場のデザインが必要になるのだと感じられ、これからの協同労働について考えることができた。
- 「野の」の岡田さんをはじめ、「若者たち」「当事者」の生の声から、働くことを問い直すきっかけになった。
- 何の為に働き、生きるのか。それでも生きていかなきゃならない現実で、協同労働は一つの選択肢の可能性を感じた。
- 協同労働とは、隣人を知り、地域を知り、一緒に働くことだと気づいた。
- 自分がどう生きたいのか、何をしたいのか考えることが社会全体をみたときにこだわりが強いのかと思うこともあった。今回、お話を聞いてそんなことはないと思えた。
- 協同労働の選択はもっと万人に共有されてしかるべき。
- 自ら主体的に働く、動くことでつながる地域の中で役割を得ること、働くこと—暮らし—学びは別々ではなく、つながっていることだと考えることができた。
- 協同労働をもっと知りたいというきっかけになった。三鷹を中心に活動を行っているよ

うなのでその流れが自分の住んでいる地域にもきてほしい。

■協同労働から「なぜ働くのか」という哲学的な問いまで発展し、とても興味深かった。

■まちづくり講座に参加した方の言葉が直接語られたことが良かった。「自分が何をしたいのか」私も深く考えてこなかった。転職を重ねているが、「ある仕事にあわせてきた」のが現状。様々な価値観の人と出会うのは大切だと改めて感じた。

(2) 第2部

①講演内容

辻浩さんから「＜共生と自治＞への社会教育的アプローチ」をテーマに講演した。講演では3つの視点から深めることとした。

第1の「社会教育にとっての＜共生と自治＞」では、「社会教育の歴史的 성격」と「共生と自治の二つの方向」のあり方を示した。歴史的 성격では明治期から今までのあり方を報告した。共生と自治の二つの方向では、上からの要求と下からの要求が合流するなかで、支配的な力による国民意識の統合とともに、民衆が主体性を持ちながら協力して取り組まれていることが語られた。

第2の「社会を見る目を育てる戦後青年教育の蓄積」では、4つの時間軸に分けて解説された。第1は「戦後改革期」（1945年～1950年代後半）で代表的実践として農村の青年活動をあげ、教養ある年長の青年指導者による啓蒙的な色合いがあったとのこと。第2は「高度経済成長期」（1950年代末～1970年代初期）で、代表的実践として勤労青年学級であり、資本主義社会の中で苦しむ者同士の「真の仲間づくり」がされた。第3は「低成長・経済大国期」（1970年代中頃～1980年代末）で代表的実践として障害者青年学級で、学習権保障、生活を見つめての表現活動、社会参加であった。第4は「格差拡大期」（1990年代以降）で、代表的実践として若者支援事業・学習教室をあげ、居場所から働くことへ、働くことができる経済社会の展望とした。

第3の「＜共生と自治＞から考える協同労働と出番のある地域づくり」では、長野県阿智村での人口減少に立ち向かう自治の事例を紹介しながら、＜共生と自治＞の根幹として、出番のある地域をつくることの実践方法として協同労働があることを話された。

②講演感想

■協同労働を意識して、皆で現場づくりをすることができたら良いと思った。

■支援する人間にも競争原理ではなく、周囲と協同する姿勢を保ちつづけるべきとあったが、自分自身はどうかと考えていた。「出番はあるだろうか」「一緒に学べる環境があるだろうか」。それを作る為にはどうすればいいか考えさせられた。

■「公助」を肩代わりさせる「共助」の良さと感じます。出番のある社会、相互扶助がある社会、場をつくりたいと思っています。

③第2部 鼎談

佐藤洋作さんから「若者たちの生きづらさを越えて～『もうひとつの働き方』へ スローな、構想と実行が統一された疎外されない、ディーセントな働き方」として、協同ネットの取り組みを報告した。不登校や引きこもりの若者の居場所・働く場・学ぶ場を仕事や地域につながる事例が話された。井口啓太郎さんからは「＜共生と自治＞の拠点としての公民館－国立市公民館の若者たちの実践から－」として、社会教育施設の公民館の実態と、国立市公民館での喫茶「わいがや」の実践を紹介した。

鼎談では、「公と民の間を誰が橋渡しするのか」、「若者が地域で他者と出会う意味」、「若者の出番のあるまちづくりへの展望」の話題が出された。

④第2部鼎談感想

■子ども・若者が地域に参加することで、子ども・若者の自己肯定感や大人や社会への安心感を得る。地域住民にとっても子ども・若者とつながりが生まれる機会になる。

■喫茶わいがやでは地域の「声」をお互いに聞く場であり、誰かにとっての居場所でもあり大変参考になった。誰も取り残さない社会・地域づくり、子ども若者の出番のある地域づくりのきっかけになると感じた。行政との連携も考えたい。

■「失敗することを恐れる若者」「評価を恐れつつ評価されたい若者」ということばが心に刺さった。人の目が気になる社会で若者を苦しめてきたのはこれだと思った。



2部の講演



2部の鼎談

(3) 全体感想

■長く働いていると「何のために働いているのか」が見えなくなる。一度立ち止まり「自分にとって、社会にとって本当に必要なものは何か」を考えることは貴重だと感じた。

■日々の仕事に追われるが、「何の為に働き、何の為に生きるか」を議論したい。

■現在に至るまで、地域とのつながりを感じず、「地域」という概念が自分にはないのが正直なところであるが、今後、「地域」と子ども・若者をつなげ・出会いをつくっていくことの大事さを改めて感じた。

■若者、中高年と分けて考えず、'まぜこぜ'にした方法で社会を考えていけないものだろうか？と考えた。また辻先生の「反応し合いながら、元気になっていく」は大切だし、井口さんのような公務員が多くなればよりよい社会が作れそうな気がした。

5、事業成果

「民学産公」協働研究事業として講座・シンポジウムを実施して、三鷹市内での協同労働の実装化への実証実験の視点から3点の成果があった。

(1) 三鷹市で協同労働を軸に、団体が連帯してつくる仕事おこしの萌芽が生まれた

第1は、三鷹市で協同労働を軸に、連帯してつくる仕事おこしの萌芽ができたことである。講座で「野の」「協同ネット」「ワーカーズコープ」を知るなかで、「野の」のシェアキッチン事業に、風のすみかの「すみかふえ」がオープンした。またワーカーズコープの現場に講座参加者が訪問する動きがあったり、「野の」には、協同ネットやワーカーズコープの仲間が訪問するなど、団体間での人の交流が始まっている。会場で「『野の』を訪問したことがある方」と聞いたところ、会場の半分程度が手をあげていた。一つの団体で仕事を起こし、広げるだけではなく、団体間がつながり知り合うなかで、仕事を起こすことや今後のつながりから生まれる多様な活動をはじめのきっかけにもなった。

(2) 協同労働への共感・理解の広がり

第2は多様な出会いを通じて、協同労働への共感・理解が広がったことである。それは前述の講座やシンポジウムの感想からも見てとれる。講座では協同労働への問いや疑問、感想を出し合った。シンポジウムでは、協同労働を始めて知る人も多くいるなかで協同労働への共感が集まった。講座の受講生の3人の生の話や協同労働を実践する「野の」の岡田報告から、協同労働がより社会や自分に必要とされていることを参加者に投げかけるものになったと考えている。

(3) 協同労働を軸にした学習運動のコミュニティがつくられた

第3は、協同労働を軸とした学習運動のコミュニティが生まれたことである。一人ひとりが地域で「働くこととは」「生きることとは」などの根本的テーマについて、自分の体験や経験、考えを吐露し、自らの生き方・働き方・暮らし方を探究する場になった。この場を継続して開催してほしいという思いが多数寄せられたことは、この場所が、居場所や話し合える関係がつくれたことを証明しているのではないかと考えている。

本事業の直接的成果ではないが、この2年間、まちづくり研究員として活動するなかで協同労働を志向する「野の」のメンバーと懇談し、10月にお店をオープンしたことは、本研究事業を成功させる意味でとても大きな出来事であった。それは協同労働で運営する団体が三鷹市内で存在することで、より市民が協同労働を認識しやすくなるからである。それは3つの成果を得る上で、大きな要因であったので付記する。

6、今後の取り組み

今後の取り組みとして、積み残された課題をもとに3点示したい。

(1) 講座後のコミュニティの継続

第1は講座後のコミュニティを継続させ、協同労働を軸とした仕事おこし・地域づくりを考える場をつくることである。講座受講生が集まる機会を継続的に開催したいとの声から、3月1日に再度集まることになった。私が呼びかけ人にはなるが、今後の講座後のあり方は、参加者がより主体となるコミュニティづくりに向かいたい。一足飛びに「仕事おこし」までいくことは時間がかかるが、市民一人ひとりの夢や困りごとを出し続けられる場を継続して、はじめて居場所づくりに向かうことが多いことを全国のワーカーズコープが主催したまちづくり講座の事例からも感じている。その意味では焦らず、場をつくっていきたい。講座参加者には、地域の未来について「あまりイメージができない。今まで地域と関わったことがないから」という声も寄せられた。より地域で協同の取り組みを発見し、それを伝え、広めていく取り組みも同時に必要だと考えている。

(2) ワーカーズコープセンター事業団の三鷹市内での拠点づくり

第2は、協同労働をより三鷹市内で実装化するために、ワーカーズコープセンター事業団の拠点を三鷹市内につくることである。労働者協同組合の働き方とは何かを探究するなかで、協同労働を発見したワーカーズコープセンター事業団の事業所が、未だに三鷹市には存在しない。センター事業団があるとより全国の労働者協同組合の実践を学びやすくなり、三鷹市内でも生かしやすくなる。センター事業団は指定管理者や委託等で公共施設の運営、高齢者介護、困窮者支援等、全国各地で多様な事業をしている。そのような事業を市内でつくるのが協同労働の周知や実践をより加速化させると考えている。

(3) 三鷹市協同労働推進ネットワーク（仮）づくり

第3は、協同労働を志向する団体・個人と出会うことを推進する「三鷹市協同労働推進ネットワーク」（仮）をつくっていくことである。この研究事業で出会った皆さんと連帯し、より協同労働を推進していく団体をつくることができると考えている。すでに地域でコモンズ（社会的共有財産）をつくることを目的に「コモンズ三鷹武蔵野会議」を立ち上げているが、その会議と連動させ、協同をテーマに「仕事」「学び」「暮らし」「居場所」づくりができると考えている。

7、最後に

講座目的であった「協同労働の働き方を参加者同士で学び、それを仕事おこし・コミュニティづくりに生かす」は、未だ道半ばである。しかし本事業で多様な市民と出会い、仕事おこしの萌芽が生まれ、協同労働や労働者協同組合の理解や共感が広がったことは、三鷹市内で協同労働や労働者協同組合を実装化していくための大きな一歩を踏み出すことが

できた。

私は、講座で「誰かに働くことや生きることを委ねず、自分で働くことや生きることをデザインすること」「既存の社会に適応するだけでなく、創造する」「自分の弱さや力を出せる関係性を多様な人とつくりながら、多様な価値観や出会い、話せる空間や居場所をつくりたい」と構想し開催してきた。市民自治を推進する協同労働を三鷹市内で広めることで、三鷹市の政策である「市民との協働」がより推進され、市民自らがコミュニティ（職場・家庭・学校・地域）をつくる主人公であることがより広がればと考えている。

今後も、労働者協同組合・協同労働を研究する協同総合研究所で働く労働者の視点とともに、三鷹市民として暮らし続ける市民の視点を融合させ、地域社会で協同労働の研究と実践をつなげていく。